短編集03【Junk-Junction】

高岡たかを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短編集０３【Ｊｕｎｋ－Ｊｕｎｃｔｉｏｎ】

【Ｎコード】
Ｎ２９１６Ｔ

【作者名】
高岡たかを

【あらすじ】
コメディ系過去作品短編集

Mr.ボマー

俺の名前はボビー・マグダネル。
だが、人は俺をこう呼ぶ。『爆弾魔（Mr ボマー）』と。
そう、俺は爆破のアーティスト。
爆破専門の殺し屋さ。
今回の依頼は、とあるホテルにお忍びで宿泊中のK国の高官を爆殺する事。
そのために俺は、とっておきの新型指向性爆弾を用意した。
小柄なクセにとびっきり過激でヤバい奴だ。
おっと、忘れちゃいけない。髪の毛より細い、糸状信管もちゃんといるぜ。
こいつをエレベーターのドアの内側にセットしておくんだ。
するとどうだ。
ターゲットがエレベーターを開けた瞬間、こいつは勢いよく目を覚ます。
バックドラフトのような炎と爆風が、ターゲットを一瞬で天国のママのところまで吹っ飛ばすって寸法さ。
乱暴者の爆風はエレベーターと廊下を黒コゲにするが、他の宿泊客の部屋には一切手をつけない。
狙うのはターゲットだけさ。
どうだい？　サイコーにクールでアーティスティックだろ？

と、いう訳で俺は朝早くからホテルに侵入し、エレベーターに爆弾をセットした。
こいつは思春期のティーンエイジャーよりデリケートでナイーブだ。すぐにカッとなるから、一度セットしたら最後、天才の俺でも外せねえ。

さて、後は間抜けなターゲットが罠にかかるのを待つだけだ。
俺はアジトのソファーに腰かけ、上モノのブランデーをやる自分を想像した。
ブランデーをやりながら、自分の芸術をワイドショーで眺めるのが、一仕事終えた後の楽しみなんだ。
工具を片付け、いそいそとエレベーターを出ようとしてふと気づいた。

俺はここからどうやって出ればいいんだ？

Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ　Ｍｒ．　Ｂｏｍｂｅｒ

Ｍｒ．ボマー（後書き）

０８年ごろに書いた作品です。
思い入れは……とくに無いですねえ。

ダイイングメッセージ

――まさかアイツが犯人だったとは。
昨夜、ワシの屋敷で起こった不可解な連続密室殺人が、アイツの仕業であったとは。
早く。一刻も早く、皆にこの事実を伝えねばならぬ。
だが、それは果たせそうにもなかった。
なぜなら、ワシもまた犯人の魔手にかかり、腹からおびただしい血を流しながら、自らの寝室で倒れているからだ。

……ぐう。目がかすむ。
体も動かない。
もはやこれまでか……。
諦めかけたその時であった。
死の足音近づくワシの脳裏にまさしく閃光の如く閃くものがあった。
そうだダイイングメッセージを残せばよいのだ。
だが、犯人の名前をそのまま書くような短絡的なものではダメだ。
気づいた犯人に隠ぺいされてしまう可能性がある。
難しすぎるのもいけない。伝わらなければ、意味などまったくないのだ。
知的で、適度に難しくて、誰かが解読した時に、「あ、そういう事かー。あのジイさんやるなー」とワシの評価が上がる感じの……
ああ、意識が朦朧としてきた……。
いかん。まだ死ぬわけにはいかぬ。メッセージを残していない。
何かないのか。インテリジェンス溢れるロジックの素晴らしいアイデアが。
ダイイングメッセージを……メッセージを……

突然、けたたましい音とともに扉が破られた。

「大丈夫ですか！　警察です！」

「旦那さま！　犯人は自首しましたぞ！」

「おじい様！　ご無事？　まさか、あの人が犯人だったなんて意外な展開ね！　トリックも全部明かされたわ！」

メッセージを……

「やや！　旦那さまからすごい血が！」

「きゃあ！　おじい様しっかりして！」

「今救急車を呼びました！」

メッセージを……まだアイデアが浮かんでない……。

◆◆◆

「こないだお前が担当した事件のジイさん、息を吹き返したんだってな」

「ああ。即死でもおかしくない出血量だったんだが、ダイイングメッセージのアイデアが考え付かず、死んでも死に切れなかったらしい」

「それで八時間も持ちこたえたのか。執念だな」

――終

ダイイングメッセージ（後書き）

拙作『Ｍｒボマー』と同時期に書いた作品です。
こちらもとくに思い入れがありませんね。

叙述トリック考

「小説を書く上で、文法や表現方法、登場人物やそのものの物語性など、重要なものを上げれば切りがないが、エッセンスとしてのトリックも外せないな」

文芸部の部室。窓際の席で偉そうに椅子に腰かけて嶋田は言った。

「ふむ。トリックか。次の作品はミステリーかな」

僕は携帯電話から目を離さずに言う。

「トリックと聞いてすぐに推理物を思い浮かべるのは少々短絡的だ。別に密室や替え玉だけがトリックではないよ。叙述トリックというトリックもある」

「叙述トリック……」

「叙述トリックというのは、推理物における犯人が他の登場人物にしかける隠蔽工作としてのトリックとは本質的に意味が異なる。言うなれば、作者が読者に対してしかける表現方法としてのトリックだ」

「たとえば？」

「読者側の先入観を逆手に取る必要がある。今、トリックと聞いてすぐに推理物が出てきたのも先入観の一つだ。細かい説明は後の機会に譲るとして、そうだな。一人称が『ワシ』で老人言葉を喋る人

物が登場したとする。地の文で他に分かる事は小柄な女性である事だけだ」

僕は「ふむ」と一息ついて考える。

「それだけなら老女と思いこむ可能性があるな。真実は八歳の愛くるしい少女かもしれないのに」

「現代の文芸において、八歳の少女に対して地の文で『小柄な女性である』とだけ紹介する場合は少ないだろう。ストレートに『愛くるしい美少女だ』と紹介してくるだろうな」

「しかし、読者に誤ったイメージを持たせないだろうか？」

嶋田は頷く。

「そこが狙いだ。地の文で開陳する情報をあえて抑えたり、重要な要素を書かなかったり、本来なら不必要な文を書いたり、描写を不明瞭にぼかして読者を間違った方向に誘導するんだ。一人称で語られるスタイルの小説なら、犯人は実は語り部本人だったり、推理物ではなくても実は性別が逆でした、というパターンもある。他にも嘘を本当だと思い込んでいる場合もな」

「でも、それは読者が書かれている事が全て真実であると盲目的に思い込む事が前提になっていないか」

「推理物ならば、読者に開示する情報に制限をかける事はアンフェアであると非難されるかもしれないな。ミスリード程度なら可愛げがあるが、読者様を騙すとはけしからん、という訳だ。しかし、おかしな話だよ。推理物にあって読者は別に語り部や探偵役と一緒に

犯人探しをする必要なんてないのに」

「ミステリーファンが聞いたら怒られそうだ」

と、部室の鍵を持った後輩がやってきた。

「あれ？　嶋田先輩何やってるんです？」

僕は『部室の外』にいた。部室には鍵がかかっていて入れなかったのだ。

廊下の『窓際』に勝手に椅子を置いていた嶋田は答える。

「なに、叙述トリックについて『一人』で少し考えていてね」

「？」

後輩は怪訝顔。

「分からないかな？」

僕――嶋田は『文芸部の部室』前の廊下『窓際』に勝手に置いた『椅子に偉そうに腰かけて』『携帯電話から目を離さずに』言った。

「本当は『一人』しかいないのに、まるで『二人』の人間が喋っているかのような『小説』を『叙述トリック』を使って書こうと思ったんだよ」

おわり

叙述トリック考（後書き）

書いたのは０９年ごろでしょうか。小技に頼って強引に押し通した作品です。
小技しかないです。
コンセプトは「実験的なものを」。
自分で書いておいて相当ひねくれてるなあ、という印象があります。
やはり無理があったかな、と。
賛否両論どころか否しか出てこない気もしますが、（実際の反応は苦笑いでしたが）伝えたいと思ったのは、当時大学文芸サークルの後輩たちに
『こういう小技が存在する事』と『こういうのも言い張れば、まあ、作品になる』
という事。
そんで、多用するとエライ目にあうという事ですね。

伝説の補欠

県予選大会準決勝。
八回裏ワンアウト二塁三塁、長打一発が出れば逆転のチャンスで時間が止まった。
それはもう、唐突に止まった。
なんで時間が止まった事が分かったか、って？
俺以外の全てが止まったからだ。
こんなのバカでも分かる。
単純な理由だろ？
見れば、難しい顔の腕組で、口を一文字に結んだ監督が止まっている。
スポーツドリンク片手に味方の一打を待つエースでピッチャーで四番で、キャプテンでおまけに成績は学年トップでもう一つおまけに可愛いマネージャーで一年下の菅原裕美と付き合ってる（ちくしょう！）塩谷も止まっている。
隣に座った俺と同じく補欠の鳥飼も止まっている。
つまり、ベンチにいる全員が止まっている。
こちら側のベンチだけじゃない。
反対側、今日の対戦校である館浪商業のメンバーも。グラウンドに散らばる両チームの選手達も。観客も。吹奏音楽部の奏でるルパン三世のテーマも。
白い雲も。ボードの時計の針も。
全て止まっている。
何だコリャ。
何が起きた。
つーか何で俺だけ動けるんだ？
え？　えっ？

世界中の時計の針が止まった中、俺だけが止まっていない。
これはつまり――
一瞬の逡巡が俺の脳を駆け、一秒の半分もかけずに答えが算出される。
……これってつまり、何をやってもＯＫ、って事だよね！
よっしゃ。
よっしゃ。
どうしようかな～。
やりたい事いっぱいあり過ぎて迷っちゃうな～。
う～ん、と唸りながらとりあえず俺はベンチから立ち上がった。
やりたい事はごまんとあるが……

「……グヒ」

俺の視線の先には、帽子を被ってスコアをつけるマネージャー、菅原裕美の姿が。当然彼女の時間も止まり、ピクリとも動かない。

「ゲヒヒ」

よっしゃよっしゃ。
ここから先、ちょーっとばかし隠語や伏字が増えたりするかもしれんが気にせんでくれ。俺は気にせんから。
ああ神様。
俺はアナタに礼を言いたい。
野球部に入部してから、ずっと球拾いや補欠で、ついに一回もレギュラーになる事無く三年最後の試合を迎えてしまった俺に、素敵で粋なプレゼントをありがとう、と。
涙を流しながら俺は菅原裕美の汗ばんだ肌に――

「よお」

ドッキーン！
マンガみたいな音が確かに聞こえた。
比喩じゃなくマジで心臓が飛び出すかと思った。
俺は可愛い年下マネに伸ばしかけていた手を戻しながら、油の切れたブリキの人形みたいにぎこちなく振り向く。
そこに、ソイツはいた。
さっきまで俺が腰掛けていたベンチに、俺と同じ城ヶ咲高校野球部のユニフォームを着込んだソイツが座っている。
声の主であるソイツは、にきびの浮いた口元に、ニヤニヤ笑いを抱えていた。

「なにマジびびってんだ。このどエロ」

「なっ！」

一部始終を見られていたのかと思うと、冷や汗が吹き出る。
顔に血が上り、紅潮したのを自覚する。
そうだよなあ。おかしいよな。時間が止まるなんてある訳ないよなー。
言いようの無い期待を失った俺は――。
……待て。
依然辺りの人間は動いていない。
時計の針は進んでいない。
やっぱり時間は止まっているのだ。
動けるのは俺とソイツだけ、って事。

「……」

そこで俺は一つの『事実』に気付く。

いや、すぐに気付いてもおかしくなかったのだが、菅原にちょっとアレなけしからん事をしようとしていたのを見られて、気が動転していたらしい。

「……お前、誰だよ」

ベンチに座ったソイツに向かって言う。

ソイツは確かに俺と同じ野球部のユニフォームを着ているが、俺の知った顔ではない。

今年入った一年生は今頃、観客席での応援だろうし、同じ釜で臭い飯を食ってきた二年生や三年生のツラを忘れる俺じゃない。

それにコイツは、ほんのさっきまでどこにもいなかったのだ。

まるで幽霊みたいに――

ソイツはニヤリと笑った。

「先輩に聞いてないか？　オレはほら、アレだよアレ。伝説の補欠だ」

ソイツの足元、本来ならスパイクを履くべき足が冗談みたいに透けていた。

「……！」

思わず一歩後退する。

え？　え？　え？

「聞いた事ない？　オレの事」

ソイツ――伝説の補欠は首をかしげる。

野球部に伝わる伝説の補欠の伝説。

正直に言えば、その話は聞いた事があった。
俺が一年の時、合宿の夜に先輩から聞いた話だ。

今から十年以上前、城ヶ咲高校野球部にある補欠がいた。
この頃の城ヶ咲高校の野球部は強く、県内では四強と呼ばれ、何度か甲子園の土を踏んでいる。
そのため、レギュラーは特待生の独壇場であり、一般入試組だったその補欠にはレギュラー入りは至難だった。
それでも補欠は諦めなかった。
せめて代打でも、とバットを振り続けた。
出番を一番隅のベンチで待ち続けた。
そして三年生の最後の試合。念願の夢だったスタメン入りが許されたのだ。
しかし、そこで不幸が起きる。
交通事故。
横転したトラックが積んでいた木材の下敷きになった補欠は、一度もバッターボックスに立つこと無く、命を失った。
そして補欠は伝説になった。

今では、試合中にその補欠の恨み声が聞こえるとか、部室の天井に人型みたいな染みが出来るとかで、城ヶ咲高校七不思議の一つとして数えられている。
目の前にいる野球部員。
ソイツがその『伝説の補欠』なのか……！

「だからそう言ってんじゃねーか」

伝説の補欠はつまらなそうに鼻をほじっている。
鼻くそをほじる幽霊。
色んな意味で衝撃的だ。

俺が今だ言葉を失っていると、伝説の補欠はベラベラと喋りだす。
「八回４対２かー。おいおい負けてんじゃん。オレらが現役の頃は館浪商業なんて消化試合もいいとこのザコちんだったけどな」
それから、バッターボックスに立つレギュラーで七番、倉本の背を見て、
「ああー、ありゃダメだわ。緊張で腕にいらん力が入りすぎてんぜ。良いとこフライ打ち上げて終わり、ってとこだろうな」
まるで近所のちょっと野球が好きな甲子園おじさんみたいな事を言う伝説の補欠。まあ、生きてればそれくらいの年なのか。
伝説の補欠が、ふいと俺の方を向いた。
ドキリとする。
「……よお、おたくさあ、試合出ないの？」
ちょっとムカついた。
「出ねーよ。アンタと同じ補欠だから」
伝説の補欠は「はん」と鼻で笑う。
「知ってるよ。一年の頃から見てるから。一回も試合で使ってもらった事ないよな」
知ってて言ったのか。かなりムカついた。
伝説の補欠はクックックと、日に焼けた肌と対照的な白い歯を見せて笑っている。

健康的な幽霊ってなんか嫌だな。
と、いきなり伝説の補欠の表情から笑みが消えた。
「おたく、名前なんてーの」
声のトーンが少し落ちている。笑ったり鼻くそほじっているより、そうしている方がよっぽど幽霊らしかった。
「一年の頃から俺の事見てたんだろ？　なら名前ぐらい分かるだろ」
さっきのお返しをされたと気付いたのか、伝説の補欠は苦笑。
「バカヤロ。こう言うのは手順が大事なんだよ」
仕方なしに俺は答える。
「石岡。石岡辰也だ」
「へえ」と伝説の補欠は再びいやらしい笑い方をする。
「辰也ねえ。タッちゃんだ。『石岡辰也は世界で一番浅倉みなみを愛しています』ってか」
うわやっぱコイツムカつくわ。
「うるせえよ。オヤジかお前は。つーかお前の名前何て言うんだよ。自分も名乗るのが礼儀だろ」
「オレ？　オレはホラ、もう死んじまってるし。だから伝説の補欠でいいよ」

そう言って伝説の補欠は笑う。
そんな伝説の補欠に、俺は一つ、聞きたかった事を尋ねる。
「なあ、アンタがここにいるのって、やっぱ成仏できないからなのか？」
伝説の補欠は少し間を置くと、
「……まあ、そうなるんだろうな。自縛霊って訳じゃねえけど」
時間の止まった空を見上げて言った。
成仏できない理由。
それってやっぱ――
「試合、出たかったのか？」
伝説の補欠は、意外にも首を縦に振らなかった。
「別に。もう三年だったしな。出れるっても何を今更って感じ。っうか、おたく何で立ってんの？　座ったら？」
そう言って伝説の補欠が勧めるのは、隣の鳥飼が座っていたベンチ。
仕方なく俺は鳥飼を横にどかして、ベンチに腰掛ける。
丁度二人でグラウンドを見る形になった。
しかし先輩から聞いてたのと随分違うな。
抱いた印象を素直に口にする。
「もっと真面目な野球少年かと思ってたよ」

伝説の補欠は愉快そうに肩を揺すった。

「尾びれ背びれが付いてんだよ。オレそんなに真面目にやってたつもりないし。おたくと一緒さ。ただダラダラ三年間続けただけ」

何となく親近感みたいなものを感じるのはそのせいか。

「だけど――」一旦前置きして伝説の補欠は続けた。

「三年最後の試合。アレは嫌だったな」

「なんで？」

「だってよ別に実力があった訳じゃねーもん。要するに高校球児としての最後の思い出作り、って奴？　それがお情けみたいで嫌だった。それでも行かなきゃなんねーから嫌々自転車漕いでたら、こう――」

目の前で手振りで示す伝説の補欠。倒された掌は下敷きになった自転車か。

「それでポックリ逝っちまった、と」

「そう。んでこのザマ」

俺の隣で頬杖ついた伝説の補欠は長く息を吐いた。

溜め息と呼ばれるモノだ。

「……自分が死んでんの、とっくの昔に分かってんだけどさ。気が付いたらこういう風に試合見に来て、ベンチ座って、監督の声かか

んの待ってんだよな。もうぜってー試合に出る事なんて無いのにさ。分かってんのにさ。生前の習慣って怖いね」

そう言う伝説の補欠は、遠い所をじっと見詰めていた。

「オレさ、もう疲れたんだよね。幽霊がそういう事言うのも変だけど。……なあ。おたくさあ、オレの代わりに試合に出てくんない？」

「……はあ？」

あまりの事に――いや、物語的に伝説の補欠が出た時、半ばこうなる事を予感していたとは言え、咄嗟に返事が出てこなかった。

え？　え？　え？

幽霊の代打って何？

戸惑う俺に、伝説の補欠は構わず続ける。

「断ち切って欲しいんだよ。オレの代わりに。オレの代わりにオレに良く似たおたくが打席に立ってくれれば、きっとオレ、自分に区切りつけられると思うんだよ」

「何言ってんだ！　お前の都合じゃねえか！」

「お前は良いよ。この試合終われば引退だから。だけどオレはさ、ずうっとこのまんま出番待ってなきゃいけないんだぜ。拷問だよコレ」

伝説の補欠の表情は変に歪んでいた。

きっと無理して笑おうとしているのだろう。

「……無理だろ」

俺の口をついたのはその言葉。

「一年の頃から俺見てんなら知ってんだろ？　俺が一度も試合に出た事無いの。そんな万年補欠の俺が出られる訳ないだろ」

食い下がる伝説の補欠。

「まあ、万年補欠どうしだから通じ合ってここにいるとも言える。っつても言っとくが同じ補欠でもお前とオレじゃ格が違うからな。オレなんか伝説だし、リトルリーグの頃から補欠やってたからキャリア長いんだぜ」

「いや、そこ張り合うとこじゃないし。つうか補欠をポジションの一つみたいに言うなよ」

俺は被りをふって溜息を一つ。

「とにかく無理。絶対無理だ」

出れるなら、とっくの昔に出てるさ。
出て菅原にカッコいいとこ見せてるさ。
でも無理なんだ。
俺は補欠だから。
同期のみんなみたいに上手く出来ないから。
後輩達と一緒に球拾いしたり、輝く表舞台に立つ仲間を、薄暗い場所から応援するのが関の山なんだ。
うつむいた俺の肩に、ポンと手が置かれた。
顔を上げる。
伝説の補欠がちょっとだけ真面目な顔をしていた。

「タッちゃん。手見せてみ」

言われるまま右手を差し出す。

伝説の補欠は俺の右手を取ると、掌を出させた。

俺の掌。

三年間、とにかく続けた練習で幾つも出来たマメが、厚く硬く盛り上がっている。

「オレの同期の連中はさ、みんなもう社会に出て就職してんだ。オレが出来なかった事をやって、今はみんな野球離れちまってるけど、たまにゴツゴツの掌見てさ、『ああ、オレ昔がんばってたな』って」

「……」

「なあ、タッちゃん。オレ知ってるぜ。おたくが一年の時、頑張ってた事。二年の春、あの女子マネが入部してきた時、カッコいいとこ見せようとしてた事。全部一ヶ月も持たなかったけど。でもそろそろさ、もう一度頑張ってもいいんじゃねえの？」

「……ちっ」

俺は顔を背けて舌打ち一つ。

何で俺がこんな事に――

「出ればいいんだろ！　出れば！」

伝説の補欠は笑った。

いやらしさの欠片も無い、悔しいけれどいい笑顔だった。

「そうと決まれば――」

そう言って伝説の補欠は館浪商業のピッチャーの特徴や弱点を教えてくれた。

やれ奴は予選からずっと投げ続けてるから疲れが溜まっているだの、奴の切り札の高速スライダーは三球に一球はすっぽ抜けて棒球になるとか。

「……詳しいな」

「そりゃあ高校球児を何十年もやってりゃあなあ。他校の選手データなんかもそこの女子マネ以上に詳しいぜ」

奴はニヤリ。

それはやっぱり伝説の補欠特有のいやらしい笑みだった。

「ついでだ。コレも渡しとくわ」

そう言って伝説の補欠が取り出したのは一本の金属バット。メーカーの名前が剥げている辺り、随分と使い込まれた印象がある。

「オレが愛用したバットだ。コイツでオレを空に送ってくれ」

俺は「分かった」とだけ答えてバットを手に取った。グリップが吸い付くように手に馴染む。これならイケるかも。どこからか変な自信がわいてきた。

「それじゃあな」

伝説の補欠は親指を立てて白い歯を見せた。

俺は目を閉じる。
この夢から目覚めるために。
現世への戻り際、伝説になった男の声が聞こえた。
「そうだ。一つ言い忘れてたけど、部室の天井の染み、アレやったのオレじゃないから。ただ雨漏りしてるだけだから」
声が遠くなっていく。
「分かった。みんなに伝えとく」
――目を開けると同時、大音響のルパン三世のテーマが耳に飛び込んできた。
流れる雲と、進む時計の針。
球場に溢れる声援と光。
「石岡、何かあったか？」
隣のベンチに腰を下ろした鳥飼が不思議そうな表情で俺を覗きこんでくる。
その時、金属バットの高い音が鳴った。
七番の倉本が内野フライを打ち上げ、ファーストがしっかりキャッチ。ツーアウトだ。
腕を組んで、一言も発しない監督が、ちらりとこっちに向いた気がした。
「監督！」

右手にはバットが握られている。

『代打――石岡辰也くん』

かち割れスピーカーからのコール。
背中に背負った二桁の背番号。
俺は今、生まれて初めて光の当たる場所に立っている。
普段より早い心臓の音を聞く。
背中に置いたベンチに視線をやる。
見るのは監督でも塩谷でも菅原でも鳥飼でもない。
一番端のベンチ。
伝説の補欠の伝説。
そのベンチには誰もいないけれど、一瞬、自分が届かなかった事をやろうとする俺に、白い歯を見せて親指を立てた伝説の補欠が見えた気がした。
審判が試合再開のコールをする。
バットを構えた。
ピッチャーが振りかぶって――

「きやがれ！　かっ飛ばしてやるぜ！」

――投げた。

おわり

伝説の補欠（後書き）

記憶があやふやですが、確か０４年から０５年くらいの秋に書いた作品ではないかな、と思います。
その夏の甲子園をテレビで見ていて、代打で出た子が、二塁打を打って逆転したんですよ。
それが、とても印象に残っていまして、「ちょっと作品に書いてみたいな」と思った事を覚えています。

俺が庭師でキミがメイドで

「なぜメイドをやらないのか」

学食の片隅でオレはテーブルを叩いて何故と問うた。

オレの怒りを無言で受け止めたテーブルも、さぞ理不尽を感じているだろう。

「さっきの部会で何を聞いてたんだオマエは」

対面に座っている部長が呆れた顔で言った。

「聞いていた。聞いていたよ。彼女たちがメイドをやりたくない理由を、聞きたくないけど聞いてしまったよ。何が『衣装を作るのに時間もお金もかかるし、恥ずかしいのでやりたくない』だ。そんなんでメイドが務まると思ってんのか！」

「いや、だからあのコたちメイドやりたくないって言ってんじゃん。ホント人の話ちゃんと聞け」

オレの拳はテーブルの上でふるふると震えていたが、今度はテーブルを叩かない。だって思ったより痛かったから。

「……伝統なのに……メイドカフェは伝統なのに……」

オレの所属するサークルは、毎年大学祭の模擬店でカフェをやっている。これならどこにでもあるサークルとそれほど変わらないだろう。が、なんと驚け。ウチのサークルのカフェはウェイトレスが

メイドさんなのだ。
今からさかのぼる事二年前。いかにも素人っぽいメイドさんにコロリとやられ、その日の内に入部届けにサインしたバカがいた。オレだが。

「うーん。伝統って言っても悪しき伝統って方だし、嫌がってる女子に無理やりっていうのもおかしい話だ。それに知ってる？　ウチのサークルってメイドカフェのせいで学生自治会から睨まれているんだぜ」

「ふん。別に風俗や賭場を開こうってわけでもないのににらんでくるとは、ケツの穴の小せえ連中だ。そんなにメイドが怖いか」

「ボクはお前の考え方に恐怖を感じるよ。良いんじゃないか。やらなくても。メイドをやったら売上が増えたって訳でもないし。学祭の収益は変わらないんだろ？　元会計くん？」

部長は眼を細めてオレの元役職を呼んだ。
さっきの部会でオレは女子たちに向かって、

――みんなは時間と金がかかる事を嫌がる理由にあげた。だが、これを一挙に解決する方法がある。コスプレショップで買ってくるのだ。購入費用は部費から出すから

――恥ずかしい？　ならみんながメイドになるならオレは全裸になろう！

学祭の打ち合わせだった部会は、一瞬にして現職会計への不信任決議と弾劾裁判と化した。
オレは説々とメイドの素晴らしさを説いたが、孤軍奮闘虚しく、

多数決の前に敗れ去った。

「どうしてそんなにメイドにこだわるんだ？　『お帰りなさいませご主人様』って言われて嬉しいのか？」

「ふん。そんな男優位の支配的な歪んだ欲望の低俗なヤカラとオレを一緒にするなよ。オレは自分の知っている女子がメイドさんの格好をしているという事実だけでエキサイトするのだ」

「身近になった分より低俗かつ歪んでいると思うんだが」

見れば部長が拳一つ分ほどテーブルから離れていた。素でひかれてしまったらしい。

「いや、オレにとってメイドさんという存在はだな。かしずかれて身の回りの世話をしてくれる女性じゃなくてな。こう、もっと一人の人間として独立して尊いものなんだよ」

部長は表情だけで「意味が分からない」と言った。

言ってるオレ自身がよく分かっていないのだから無理もない。

だが、一つ分かっている事がある。

それは、オレがメイドさんに対して邪な気持ちを一切持っていないという事だ。

きっとオレはメイドさんの事を想いながら、筋斗雲に乗れるだろう。

どうにかして、オレのメイドさんに対する熱く真っ直ぐな気持ちを伝えようと、たとえ話をする事にした。

「いいか？　今からわりと突飛な話をする。ちゃんとついてこいよ。話の舞台は、メイド文化華やかに咲きほこりし頃のイギリスだ」

「本当に突飛だな」

「たとえだよ。た・と・え！　分かりやすく説明したいからたとえ話を持ち出すんだよ。だからお願いですから聞いて下さいご主人様」

「まあ、そうまで言うなら少しぐらいは」

「ありがとうございます。って何でオレ下手に出てんの？　まあいいや。主人公はオレね。最近ようやく一人前になった庭師なの。で、ヒロインは地方から伯爵家に奉公に出てきた美しい少女。物語は、館の庭園の手入れをする庭師のオレが、少女と出会うところから始まる――」

――オレの名前はオリバー（仮名）。三代前のジイちゃんの代から、伯爵さまの庭園を預かっている庭師だ。

「オリバーって誰だよ」

「オレの事だよ」

「オリバー？　お前が？」

「……仮名だから。雰囲気で」

「オリバーツイスト？」

「イギリスっぽいから。続けるぞ」

――オレが彼女と出会った日の事を今でもよく覚えている。
あれは確か春。いや違った。夏だったか。秋だったような。冬だったような。春だったような。

「四季が一回りしたぞ」

「ごめん。ぶっちゃけそのへん設定曖昧」

――とにもかくにも、ある日、オレはバラ園の垣根を手入れするため、高枝切りバサミを手にハシゴを

「高枝切りバサミ持ってんのにハシゴ使ったの？　どっちか一つでよくないか？」

「じゃあ、ハシゴはやめとくわ」

――ハシゴを使うのは何か気分的な問題でやめたオレは、高枝切りバサミで垣根の手入れを始めた。
と、正門から馬車の音が聞こえる。
誰かが来たみたいだ。
……。

「どうした？」

「……いや。今からのシーンにハシゴがないと物語が進まないんだよな。垣根があるから。どうしよう」

「じゃあ、高枝切りバサミは置いてきて、ハシゴを持ってこれば？」

――やっぱり、高枝切りバサミは置いてきて、ハシゴを持ってきたオレは、垣根の向こう、馬車から一人の老婦人と、オレと同い年くらいの少女が降りてくるのがよく見下ろせた。

老婦人の方は、この伯爵家に長く奉公する女中長だ。

かたわらの少女の方は、初めて見る顔だが、おそらく、新しく伯爵家に奉公に上がったメイドだろう。

女中長は、厳しい顔つきで少女に、

「おい、お前目がイッちゃってるけど大丈夫か？」

と聞いた。

いや、女中長はそんな事言っていない。

女中長は「このお屋敷が、今日から貴女が働く事になる伯爵さまのお屋敷です」と言ったのだ。

少女は俯き気味のまま、女中長に、

「ごめん。その話長くなりそう？」

と言っていない。

言ったのは部長だ。

オレは頭でテーブルを叩く。ガインと音がして、出会いのシーンで少女マーガレット（仮名）が見せた一筋の涙や、月光の下、青く染まった花園で少女が好きだと言った花の名前や、故郷の許嫁とオ

レとの間で揺れ動くマーガレット（仮名）の迷い。そして永遠の別れと墓前に供えた約束の花。その全てが粉々に砕け散った。

「なんだよ。今良いとこだったのに」

「良いとこだったから止めたんだよ。お前、今完全に越えてはいけない一線越えてたぞ。ボクがイッちゃってる目で、自分を主人公にしたスペースオペラな冒険活劇の話を始めたらお前どうする？」

オレは少し考え、思った事を口にした。

「とりあえず適当に話やめさせて、ケータイからお前のアドレス消す」

「そうか」

と、部長がケータイを取り出したのでオレは慌てた。

「ウソウソ！　さすがにそこまではしないって！」

「しないのか。まあ、お前の与太話はさておいて」

そこで部長は視線をオレの肩のあたりに移動させた。

いや、肩ではない。オレの背後を見ているのだ。

「彼はどうやらメイドに対していささか常軌を逸する情熱を持っているようだが、キミたちはどう思う？」

後ろのテーブルについていたのは、後輩女子の仲良しグループだった。

「どう思う？　って言われましても……」

一人の女子がとまどいを見せる。

すかさずオレはダメ押しの一手を打った。

「オレのためにメイド服を着てくれないか？」

この単刀直入な一押しに、彼女たちの心は一気に傾いたようだった。

「絶対イヤ」

不可の方向に。

――ｅｎｄ．

◆『ここ』とは違う世界観の別の物語◆

目が合ったのは一瞬。

しかし、鼓動を跳ね上がらせるのは一瞬でも充分な時間だったようだ。

跳ね上がった鼓動は動揺を呼び、

「あ」

バランスを崩した俺は、立て掛けたハシゴもろとも不様に地面に落下した。

「くうっ……いってえ～」

落ちた先が芝生だったのが幸いした。ちょっと背中を打ったぐらいで、どこも怪我をしていない。骨でも折っちまったら仕事にならないからな。

と、

「大丈夫？」

降りかかってきたのは、そのセリフとクスクスという小さな笑い声。

そして差し出されたのは少女の手だった。

「大丈夫？　鈍い音がしたよ？」

少女はお日さまみたいな笑みをより濃くした。

芝生に尻もちをつけたままの俺は顔が熱を持つのを自覚する。

さっき目があった少女に恥ずかしいところを見られてしまった。

「あ。アタシ今日からこのお屋敷の奉公に上がりました、ドロシーって言います。よろしく庭師さん」

ドロシー。ドロシーって言うのかこの子は。

俺は少女の名を胸にしまうと、自分で立ち上がった。これ以上カッコ悪いとこ見せられないからな。それに俺の手、土臭いし。

「ステキなお庭ね。アナタが手入れをしてるの？」

俺とジッチャンが精魂込めて手入れしている伯爵さまの庭園を見

まわし、ドロシーが言った。

「ああ」

もっと気の利いた事言えれば良いのに、口から出たのはぶっきらぼうな一言。ああもう。他の顔なじみのメイドとなら、もっと楽に会話ができるのにな。

「ドロシー！　何をしているのです。早くなさい。伯爵さまへ御挨拶に参りますよ」

女中長さまの声が聞こえて、ドロシーは自分が何をしにこの屋敷へ来たのか思い出したようだった。

「いっけない！　それじゃあ、またね庭師さん」

少女は小さく舌を出して手を振った。

去ろうとするドロシーに、

「庭師のジャックだ。よ、よろしくドロシー」

ただ自分の名前を教えるのに、こんなに勇気が必要だなんて知らなかった。

「時間があったら、俺んとこ来いよ。庭園を案内してやっからよぉ。時間があったらで良いんだけど……」

「うん。ありがとうジャック！」

そう言って、今日からメイドになる少女は女中長さまの元へ駆け

て行った。伯爵さまにお仕えするメイドは走ってはいけないという決まりがあるから、ドロシーはきっと女中長さまに小言を言われてしまうだろう。

俺はハシゴをかけ直すと、仕事を再開した。

が、どうにも頬が緩んで仕方がない。

「ステキなお庭、かあ……」

伯爵さまにお褒め頂くよりも嬉しかったと思ってしまうのは、不敬だろうか？

そうだ。

とっても良い事を思いついた。

今度はもうちょっと勇気を振り絞って、彼女の好きな花を聞いてみよう。

庭の片隅に、こっそりドロシーの好きな花を植えるくらい良いだろう。

何しろ、俺は庭師なのだから。

――　俺が庭師でキミがメイドで　終

俺が庭師でキミがメイドで（後書き）

０７年に一度書いて、紛失。
その翌年くらいにメモ書きを発見して作品になったような気がします。
もう、内容からしてメイドさんへの狂気しか伝わってこないので、メイドさんへの偏執があったのでしょう。
ほとんど覚えておりませんが。
タイトルは確か、後輩の文芸作品をマネしたはずです。
やりたかった事は、タイトルと関係の薄い話を前面に出し、最後部で、ごく短い本編を書いて、
「実はコッチがタイトルと直結した作品でしたー」
とやる事。
構成のテクニックのつもりで書いたのですが、まったく成果があがりませんでした。下手だからですね。

りくるーと！　就職戦線異状あり

――就職戦線の戦友たちへ

快晴だった。
燦々と降り注ぐ午前の太陽に目を細め、アパートの前に立った雛崎昌喜は何とはなしに襟元に手を伸ばす。
指先に触れたのは、ネクタイの結び目。
大学四年生である昌喜には、普段からネクタイを結ぶ習慣はない。だからだろうか。
息をするたび、僅かな違和感を覚える。
だが、心地よい違和感だと思う。
次に触れたのは前髪。
眉にかからない程度に梳いた髪は、先日美容院に行って整えたものだ。
ワックスもヘアスプレーも嫌味にならない程度に使い、清潔感と爽やかさを演出している。
普段はスニーカーの足元も、今日は革靴だ。こちらも入念に手入れを行い、光沢を放っている。
新調したばかりの紺のスーツは、企業戦士の戦闘服だ。
袖を通すと、不思議と背筋が伸びる。
身だしなみは完璧だ。
手提げカバンの中身もチェック。
会社案内に筆記用具。履歴書三枚。実家から送られてきたお守り。
こちらもパーフェクト。
一分の隙もない。
一通りの自己点検を済ませ、昌喜は満足げに頷いた。

それも当然。
彼は三時間も前に起床し、二回もシャワーを浴び、三回歯を磨き、朝食をとった後にまた三回歯を磨いた。
鏡の前には一時間以上も立ち、何度も何度も点検を繰り返した。
真面目かつインテリジェンスな雰囲気をかもし出すために伊達メガネも考えたが、属性過多な上、狙いすぎだと思われるのも嫌なので止める事にした。
そうして今に至る。

「っしゃあ。行くとしますか」

頬を叩いて気合いを入れると、昌喜は最初の一歩を踏み出す。
何ゆえ彼がこれほどまでに、己の姿に気を使うか。
それは――

「就職戦線へ！」

今日は昌喜が希望する会社の最終面接の日だった。

電子マネーの乗車カードを使い、スタイリッシュにバスに乗り込む。
まだ早い時間だというのに、バスはそれなりに混んでいた。
何となく乗客の視線を感じる気がする。
心地よい視線だ。
あのイケメンはどこの会社のエリート営業マンなのかしら。と、乗客たちは思っているのに違いない。
昌喜は空いていた席に、パンツの折り目を気にしながら腰掛けた。
膝の上にカバンを置くのも忘れない。

頭の中で、今日の面接をシミュレーション。

パターン１

「わが社を希望した動機は何ですか」

「はい。貴社の営業理念が、自分に合っていると感じたからです」

「そのヤル気や良し。来年の春からキミを使ってみる事にしよう」

（省略）

パターン１５６

「キミはどこの大学かね」

「はい。王城大学です」

「なに？　王城大学？　私も王大の出身なのだよ」

「え！？　本当ですか！？　じゃあボクは後輩になるんですね」

「就職活動中の後輩を無下に追い出すわけにはいかん。どうだね。ここで働いてみないかね」

「はい！　よろしくお願いします先輩」

「……よし。完璧」

バスに揺られながら、脳内で質疑応答を繰り返していた昌喜は拳をグッと握る。
シミュレーションとは言え、確かな手ごたえを感じる。
百六十にもわたる仮想面接官の仮想質問に答え、その全てから仮想内定を仮想的に勝ち取る事ができた。ちなみに仮想面接の難易度はＭＡＸに設定してある。
万全だ。
これならどんな状況にも対応し、面接官の心を打つナイスな返答をする事ができる。
と、バス停に差し掛かり、バスが速度を緩め始めた。
乗り込んできたのは、大きな風呂敷包みを抱えた上品そうな老婦人だ。
だが、バスは満席。
誰も老婦人に席を譲ろうとはしない。
昌喜はしばし考え、

「どうぞ。座ってくださいマダム」

淀みのない流麗な動きで、席を譲る昌喜。
老婦人は、目を丸くして昌喜を見上げる。

「まあ。こんな年寄りに席を譲るなんて、中々どうして慈愛に満ちた若者なのでしょうか。この世知辛い世の中に、まだ貴方のような人がいるなんて。地獄で仏様にお会いしたような心持でございます」

喜びの涙を浮かべて昌喜に手を合わせる老婦人に、昌喜はハンカチを差し出す。

「涙を拭いてくださいマダム。貴女のようなご婦人に涙は似合わない。なあに。私は次のバス停で降りるつもりだったので、丁度よい

時に貴女が現れただけです」

言葉のとおり、昌喜は次のバス停で降りた。

本来、彼の降りるべきバス停はここの六つも先のバス停なのに。

「ふむ。時間には充分余裕があるし、歩いて行くか」

腕時計に目を落とし、昌喜は予定を確認。

こういう事態もあり得るかと、受付時刻の一時間前に到着出来るよう予定を組んでいたのだ。

歩いていっても充分間に合う。

次のバスをここで待つ、という考えも浮かんだが、気持ち的に一つの場所に留まるのはためらわれた。

アグレッシブに行け。と、大学の就職担当の先生は言っていた。

バスを待つよりも、歩いて行く方がアグレッシブな気がしたので、昌喜は改めて一歩を踏み出した。

天稜市と館浪町を分ける境界は、城ヶ咲の山から流れる音連川によって分かたれる。

この橋を渡れば、天稜市の中枢。目的地はすぐそこだ。

橋を渡ろうとしたその時、昌喜は女性の悲鳴を聞いた。

「誰か！　子供が溺れているんです！　誰か助けて！」

慌てて女性に駆け寄る昌喜。

身を乗り出して橋の下を見れば、六歳くらいの男の子が、溺れて

もがいている。
昌喜は迷わなかった。
「待ってろ！　今行くぞ！」
ジャケットと靴を脱ぎ、ネクタイを緩めると、欄干に手をかけ勇敢に川へと飛び込んだのだ。
ワイシャツやパンツに水が染み込み、昌喜を縛るが、大きく手足を振り、男の子を救助する。
救助された男の子は、よほど怖かったのだろう。母親に抱き着き泣いた。
母親も息子の無事に安堵して泣きながら何度も昌喜に頭を下げる。
「ありがとうございます。ありがとうございます。ああ、なんという事でしょう。お召し物が濡れてしまいました」
すっかり濡れ鼠になってしまった昌喜は、気にせずにジャケットを着込む。
「いえ。どうかお気になさらずに。スーツはクリーニングすれば元に戻りますが、人の命はそう言う訳にはいきませんから」
「ああ、なんて立派なお方でしょう。お名前をお聞かせてください。そして私にどうかお礼をさせてくださいまし」
「お礼なんてそんな。名乗るほどの者ではありませんよ。それでは先を急ぎますので、失敬」
シュタッ、とニヒルに決めて、昌喜は親子に背を向けた。
頭に水草が乗っている事に昌喜が気付くのは、ここから七百メー

トルほど歩いた先での事である。

革靴を川の水でガバガバ言わせながら、ずぶ濡れの昌喜は企業ビルの群れを歩いていた。
すれ違う人々は、皆昌喜を見て何事かと振り返る。
正直、参ったと思う。
子供を助けた事には後悔が無いが、せっかくの一張羅が台無しになってしまった。
このまま面接を受ける訳にはいかない。
どこかにコインランドリーは無い物かと捜していると、

「うわあああ！」

昌喜の目の前にあった銀行から、目出し帽を被った五人組が飛び出してきた。
会社員を人質に取った彼らは、手に拳銃と、万札がはみ出したアタッシェケースを持っている。
銀行強盗だ。
強盗は周囲の人たちを銃で牽制しながら、止めてあったワゴン車に乗り込もうとし――
またも迷い無く昌喜は駆け出していた。
昌喜に気付いた強盗たちが、銃を発砲。
悲鳴が上がる中、昌喜は放たれた銃弾を手提げカバンで弾き返し、間合いを詰める。
驚愕する強盗の手を掴んで捻り上げ、延髄にチョップ。
一撃で強盗は気を失った。
昌喜は他の四人の反撃を許さない。
そこから先は、まさに昌喜オンステージだった。

「破！」

昌喜パンチが強盗をダウンさせ。

「ふん！」

昌喜クロスシザースが強盗の腕をなんか有り得ない感じにへし折り。

「ほぉあたぁあっ！」

昌喜キックは強盗を香港映画みたいに十メートルは吹き飛ばし、強盗は何故か積み上げてあったダンボール箱に突き刺さった。

「とやあああっ！」

最後の一人に、雛崎家に伝わる三つの技の一つ、ワイヤーアクションを駆使した昌喜インフェルノをきめた。強盗ははす向かいの証券会社の八階の壁に踵まで刺さった。

「ふぅうはあああああ……」

ぶち倒し、積み上げた強盗の上で呼吸を整える昌喜に、人質だった会社員は、ひたすらに礼を告げた。

「ありがとうございます。また部長に叱られるところでした」

「いえ礼には及びません。ただ、悪が許せなかっただけです」

言いつつ、昌喜は腕時計の時間を確認し、

「……やばい」

青ざめた。

約束の時間はとっくに過ぎていた。

「――まったく最近の若いもんは。社会人になるという自覚が欠けておる」

通された会議室で担当部長の言葉を聞きながら、昌喜はひたすらに頭を下げていた。

遅刻した上に、ずぶ濡れの格好でやって来たのだから、どこの会社に面接に行っても十中八九ダメだろう。

むしろ、受付で追い返されずに面会を許された事に感謝するべきだったのかもしれない。

道中何が起きたかの釈明は出来るのだから。

しかし、昌喜の口は固く結ばれたまま、ひたすらに下げた頭を上げようとはしなかった。

大きな溜息をこぼし、担当部長が、

「キミ。王城大の雛崎昌喜くんだったかね。今日のところは」

言いかけた言葉は、会議室のドアを開けた音に断ち切られる。

「部長！　融資の件ですが」

「なんだ騒々しい。今は面接の途中なのだがね。まったくキミといい、この学生といい、今日日の若いもんはどうなっとるんだ」

「あ、はい！　すいませ……あーっ！」

唐突にあがった奇声に何事かと思い、ようやく昌喜は顔を上げた。そこにいたのは……

「なんだね。薮から棒に大きな声を出して」

「い、いえ部長。実は先ほど、銀行に行った際、銀行強盗に遭いまして」

「なんだと？」

「はい。人質にとられていたところを彼に助けてもらったのです」

さっき昌喜が救出した会社員だった。

「アナタ！」

「パパ！」

次に会議室に飛び込んで来たのは、女性と男の子だった。

「あ、貴方は……！」

「お兄ちゃん！　さっきはありがとう！」

「なんだなんだ。今度はなんなんだ？」

畳み掛けるような事態の変動に混乱気味の部長を尻目に、昌喜は驚いていた。
なんと、現れたのは先ほど昌喜が音連川に飛び込んで助けた男の子と母親だったのだ。

「おやおや。何やら騒々しいようですが一体何の騒ぎです？　おやま。貴方は確か」

そう言って会議室に顔を出したのは、バスで昌喜が席を譲った老婦人だった。
部長はもう訳が分からないといった風に天を仰いだ。

「……ああ、一体何が何やら……。部下、ワイフ、一人息子と続いて会長まで……」

会長？
今、部長は老婦人を会長と呼んだか。
昌喜の視線を受けて、老婦人は上品に微笑んだ。

「ほほほ。お察しの通り、わたくしは、この会社の会長です。企業面接に行くとは思っておりましたが、まさか我が社でしたとは。縁とは妙なものですねぇ」

確かに、漁師が溺れかけたオッサン助けたら、その人が社長で、建設会社に就職する事になった元暴走族破天荒サラリーマンの話や、とある釣りバカ社員が釣りで社長と仲良くなり、「スーさん」「ハマちゃん」と親しく呼び合って二人でドタバタする話を昌喜も聞いた事がある。
しかし、バスで席を譲った老婦人が会長だったとは。

「……会長。雛崎くんの就職の件ですが……」

部長は汗を拭きながら会長に裁可を委ねる事にしたようだった。

老婦人、いや会長は「ほほ」と上品に笑うと、

「わたくしは常々から、彼のように穏やかな心を持ちながらも激しい怒りによって目覚めた伝説の企業戦士が必要だと思っておりました。どうでしょうか？　ここはわたくしの責任を持ち、彼を採用するというのは」

鶴の一声とはまさにこの事だった。

「いや、まったく会長の仰るとおり！」

部長が懐から『日本一』と書かれた扇子を取り出した。

「おめでとう雛崎昌喜くん。我が社は君を採用する！」

会議室に歓声があがったその頃。

天稜市に隣接する鬼哭町に、二つのボール型小型宇宙船が建築物をなぎ倒して降り立った。

クレーターの中心には二人の宇宙人。

ハゲでヒゲでデカイ方が、地面に触ってこう言ったとか言ってないとか。

「良い土だ。良いサラリーマンが育つぜ」と。

……

「で、寝坊した上、面接には行ってない、と？」

ここは昌喜のアパート。

ベッドに腰掛けた昌喜の恋人、皆間真奈美が、カーペットで項垂れる昌喜に言った。

「バカじゃない？」

昌喜はグウの音も出ない。

「ぐぅ」

いや、出たが。

真奈美は呆れ顔で、

「緊張しすぎて眠れなくて、準備だけしこたましといて寝坊なんて、バカ過ぎ」

「あ、あ、でもさ真奈美。スゲーいい夢見たんだよ。バスで席譲ったおバーちゃんが会社の会長でさ、就職決まんの。途中からナッパとか出てきて訳分かんなくなるけど」

「一生夢見てなさい」

コン、と真奈美は昌喜の頭を小突いた。

「お、俺だってさあ……」

へなへなと萎びていく恋人を見ながら、真奈美はため息を一つ。
まったく。どうしてこんなパッとしない男と付き合い始めたのか。
当の真奈美にも分からない。
きっと、のび太との結婚を決意したときのシズカちゃんも同じ気持ちだったに違いない。
要は危なっかしくて放っておけないのだ。
見て無い所でどんなヘマをやらかすか分からない。
女が覚悟と言うか腹を括った時の強さを、神々しさを何と表現すれば良いのか。

「まあ良いわ。私の方は就職決まったし、しばらく養ってあげるわ。ダメ男を」

ヒモ昌喜は思わず真奈美を拝んでいた。

「うわー！　真奈美頼もしい！　あーもう！　幸せにしてね！」

「でも、ちゃんとハロワには行ってね。就職支援サイトにも登録しとく事。ホントに私に頼りっぱなしはダメだからね」

「……頑張りまふ」

時代は就職氷河期時代。
春は遠いし来ないかもしれない。
それでも、だ。
種は植えればいつか必ず芽吹いて花が咲く。
手間隙はかかるが、それも人生のスパイスだ。
職を得て食い扶持を稼いで幸せを築くために、とりあえず昌喜は種を植える事にした。

「……あのさ、真奈美。支援サイトの登録の仕方教えて」

「アンタ、ホントに登録してなかったの……？」

就職活動はお早めに。

「つーか昌喜、卒論は？　私終わったけど」

「ぐげー！」

卒論の製作もお早めに。

『りくるーと！』　ＥＮＤ

りくるーと！　就職戦線異状あり（後書き）

０６年に書いた作品です。
当時私は就職活動の真っ最中だったわけですが、大学四年で就職活動を始めるのは遅いのだと、面接に落ちて骨身に染みました。
それでも、なんとかなったので、まだどうにかなる時代だったのかな、と。
後輩たちの就職活動は本当にしんどそうでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2916t/

短編集03【Junk-Junction】

2011年10月8日07時40分発行